

[研究成果]

かみくされびょう

トマトフザリウム株腐病の防除技術（台木品種）

トマトフザリウム株腐病は、土壌還元消毒により土壌のフザリウム属菌密度を下げた上で、台木品種に“アシスト”を用いると発病が抑えられます。

【背景】

トマトフザリウム株腐病は、フザリウム属菌の一種を病原とする土壌病害で、感染したトマトは主根が激しく褐変腐敗し、枯れることもあります（図1）。本県では促成長期どり栽培の増加に伴い発生が拡大し、これに対する防除体系を確立する必要性がありました。そこで、土壌菌密度の違いと台木品種の発病状況について試験を行いました。

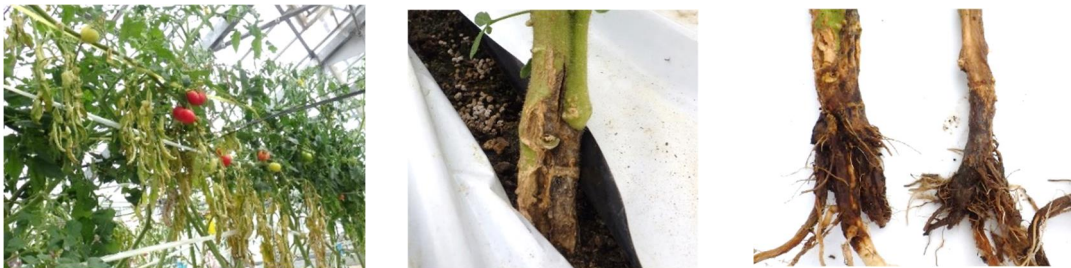


図1 発病の様子（左：地上部、中央：地際部、右：地下部）

【結果】

試験の結果、供試したいずれの台木品種・菌密度でも発病しましたが、定植時の土壌のフザリウム属菌密度が低いほど、地上部及び地下部の発病度が低い傾向が見られました。なお、台木品種“アシスト”は、地上部の発病の進みが遅く、定植時の土壌菌密度が低い場合は地下部の発病度も低くなりました（図2、3）。

したがって、定植時の土壌のフザリウム属菌密度を下げることで、その後の発病の抑制につながる考えられました。土壌のフザリウム属菌密度については、土壌還元消毒を適切に行えば、検出されないレベルに低下し、問題なく一作栽培できることを2021年度の現地調査で確認しています。

以上より、土壌還元消毒により土壌のフザリウム属菌密度を十分に下げた上で、台木品種に“アシスト”を用いることで、トマトフザリウム株腐病の発病が抑えられると考えられました。

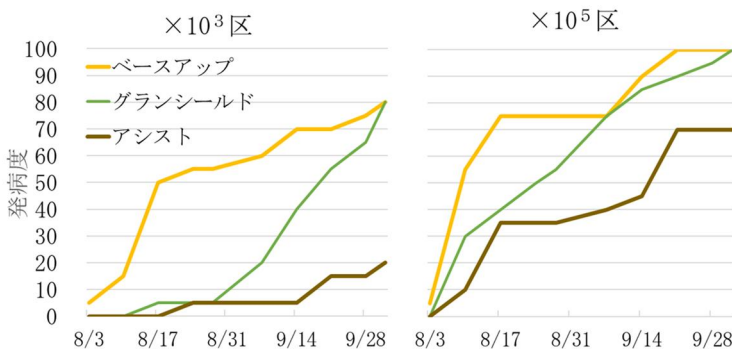


図2 土壌の菌密度及び台木品種の違いによる地上部の発病度の推移

注 10³~10⁵ は土壌の菌密度を示す。

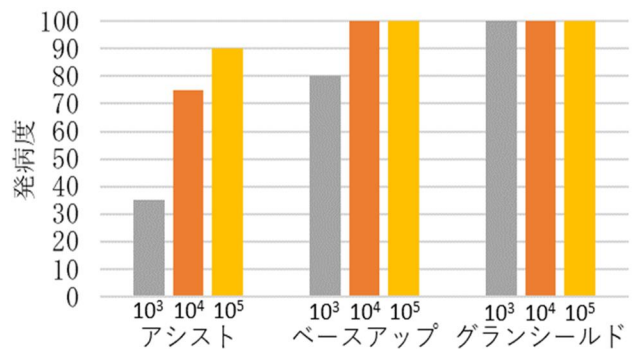


図3 土壌の菌密度及び台木品種の違いによる地下部の発病度の差異

(病理昆虫研究室 久保 晶子)